レイチェル・カーソン著『沈黙の春』を読む
—「沈黙」の意味について—

中　村　博　文

（序）

Rachel Carson(1907〜64)の名著 *Silent Spring*(1962)は、無制限に農薬などの化学薬品を使用し続けると生態系がどれだけ危険に曝されるかを、いち早く指摘し警告を発した書物である。作者 Carson は元来、女性海洋生物学者であったが、少女時代よりものを書くことが好きだったらしく、しばしば short essay を雑誌に投稿していた。文学に対する造詣も深く、それはこの書物の中に見出される John Keats や Elwyn Brooks White などからの引用によってうかがい知れる。Carson は、単に海洋生物のみならず、あらゆる動植物、医学、薬学など科学全般、更に文学も含めた諸芸術まで視野に入れた博物学者的見地からこの著作を書き上げた。

ところで、*Silent Spring* では、そのタイトルが示すように春が「沈黙」している。鳥がさえずり、山野のあらゆる植物が芽を吹き、百花繚乱の如く花々が咲き乱れる春は、生命力に満ち溢れ巷は賑わっているべきなのだ。にもかかわらず、沈黙しているとはいかなる理由か。本稿では、「沈黙」の意味に関して、イギリス・ロマン派の作品などと比較検討を加えて行きたい。

（I）

Silent Spring 第1章 "A Fable for Tomorrow" は、以下のように始まる。

> There was once a town in the heart of America where all life seemed to live in harmony with its surroundings. The town lay in the midst of a checkerboard of prosperous farms, with fields of grain and hillsides of orchards where, in spring, white clouds of bloom drifted above the green fields. In autumn, oak and maple and birch set up a blaze of colour that flamed and flickered across a backdrop of pines. Then foxes barked in the hills and deer silently crossed the fields, half hidden in the mists of the autumn mornings[1].

かつてアメリカの内陸部にあった町では、あらゆる生き物が環境に適合しながら存在していた。生物、取分けさまざまな種類の植物が、互いに持ちつ持たれつの関係を維持しながら長年にわたり周囲の環境と完全に調和しつつ植生を維持する状態は、climax(極相)と呼ばれている。因みに、植生とはある区域に群生する植物全体を意味し、flora または vegetation と呼ばれている。一つの森の中には、大木、中低木、下草、シダやコケ類、更に菌類に至るまで、すべての植物が調和を保ちながら生活しているのである。また、高等な動物から下等種まで、さまざまな動物相も森全体の調和に役立っている。無論、その内の一つでもダメージを受け破壊されると、調和が乱される結果、植生全体の破壊へと至る[2]。

ともあれ、この町ではあたかも理想郷の如き環境が保たれていた。春の訪れとともに果樹は一面に白い花をつけ、また秋には広葉樹が一斉に紅葉しそれが常緑の松と美しいコントラストを形成する。その森の中からはキツネの鳴き声が聞こえ、シカも野原を駆け巡った。更に読み続けていく。

> Along the roads, laurel, viburnum and alder, great ferns and wildflowers delighted the traveller's eye through much of the year. Even in winter the roadsides were places of beauty, where countless birds came to feed on the berries and on the seed heads of the dried weeds rising above the snow. The countryside was, in fact, famous for the

> abundance and variety of its bird life, and when the flood of migrants was pouring through in spring and autumn people travelled from great distances to observe them. Others came to fish the streams, which flowed clear and cold out of the hills and contained shady pools where trout lay. So it had been from the days many years ago when the first settlers raised their houses, sank their wells, and built their barns.

一見生気が失せたと思える冬でさえ、秋の名残の木の実を求める夥しい数の渡り鳥たちで一杯である。その光景を見るために見物人も押し寄せ、また清水で鱒釣りを楽しむ人々などで、この村は人間の往来が激しかったようだ。にもかかわらず、村は最初に開拓者が訪れた時代以後自然と人間との調和が保たれ続けてきた。

だが突然、村には大きな変化が生じた。

> Then a strange blight crept over the area and everything began to change. Some evil spell had settled on the community: mysterious maladies swept the flocks of chickens; the cattle and sheep sickened and died. Everywhere was a shadow of death. The farmers spoke of much illness among their families. In the town the doctors had become more and more puzzled by new kinds of sickness appearing among their patients. There had been several sudden and unexplained deaths, not only among adults but even among children, who would be stricken suddenly while at play and die within a few hours.

あたかも悪霊に取りつかれたかのように、家畜は疫病で斃れる。それは人間にも及び、老いも若きも短時間に原因不明の死を遂げる。"Everywhere was a shadow of death." という描写は、生気の失せた冬でさえ生命であふれていた同じ村の以前の様子と、大きなコントラストを成す。

> There was a strange stillness. The birds, for example—where had they gone? Many people spoke of them, puzzled and disturbed. The feeding stations in the backyards were deserted. The few birds seen anywhere were moribund; they trembled violently and could not fly. It was a spring without voices. On the mornings that had once throbbed with the dawn chorus of robins, catbirds, doves, jays, wrens, and scores of other bird voices there was now no sound; only silence lay over the fields and woods and marsh.

目下この村には "a strange stillness" が立ち込めている。"The few birds seen anywhere were moribund;" と述べられている点から、この stillness は一種病的な沈黙であろう。それは、私たちが森林深く分け入り、しばしの間佇んでいると、日常の喧騒と煩雑さからの癒しを得る類の沈黙ではあり得ない。続いて作者は、"It was a spring without voices. . . only silence lay over the fields and woods and marsh."と述べ、万物の息吹をまったく感じさせない死の沈黙を暗示する。

続いて作者は、リンゴは開花するものの、受粉に必要な蜂は来ないので結実しない、と訴える。およそいかなる生物でも、他の生物の助けを借りずそれ自体で生き続けることは困難である。リンゴの花に蜂が訪れ受粉を助けることにより、初めてリンゴは結実し子孫を増やすのである。生物相互の持ちつ持たれつの関係が維持されているとき、自然界のバランスもまた保たれる。しかし、今やこの村には蜂がいなくなり、その結果自然界の調和は乱されてしまった。村の環境が破壊されたと言える。

では、この村の環境はいかにして破壊されたのであろうか。

> In the gutters under the eaves and between the shingles of the roofs, a white granular powder still showed a few patches; some weeks before it had fallen like snow

upon the roofs and the lawns, the fields and streams.

No witchcraft, no enemy action had silenced the rebirth of new life in this stricken world. The people had done it themselves.

数週間前降り注いだ "A white granular powder" が、どうやらその原因らしい。しかもそれは人為的だと作者は述べる。ここで登場する村は、あくまで架空の村であり、特定することはできない。しかし、その apocalyptic な内容は、十分な説得力を持って読者に衝撃を与えるに違いない。更に読み進むうちに読者は、その "a white granular powder" が DDT であることを発見する[3]。DDT は第二次大戦後農作物の害虫退治用として盛んに用いられるようになった。既に大戦末期、軍隊ではシラミ退治の目的で人体に直接その粉末をふりかけて用いられていたが、実害がなかったということで DDT は人体に無害の農薬という迷信が生まれたようだ[4]。そのため DDT は乱用され、人畜に大きな被害を及ぼす結果となった。

DDT が散布され続けたことにより、動物、鳥、魚、昆虫などあらゆる生き物が死に絶え、村は廃墟と化した。村には死の沈黙が訪れている。

（II）

Silent Spring 巻頭の、Albert Schweitzer への作者自身の献辞の中で Carson は、John Keats の *La Belle Dame sans Merci* からの一節を引用している。Keats の作品には、「沈黙」の意味を理解する上で重要な手がかりを与えるものが存在するので、ここで少し比較検討してみたい。

先ず Carson が引用しているパッセージを取り上げてみる。"The sedge is wither'd from the lake,/And no birds sing."[5] これは作品中第1スタンザ 3 ～ 4 行目の部分である。この作品は Ballad(物語詩)形式をとり、以下のような粗筋である。

季節は冬、湖岸のスゲもすっかり枯れ果て、荒涼たる大地は不毛のイメージをもたらす。上記引用で言及されているように、小鳥たちのさえずり声はまったく聞こえてこない。*Silent Spring* でも、農薬が散布された後、かつて理想郷のようだった村では小鳥がすべて姿を消し、村は死の世界を思わせる不気味な沈黙に支配された。

そんな冬枯れの湖岸に、病的な面持ちの騎士が唯一人で登場し、語り手に事情を尋ねられる("O what can ail thee, knight at arms,/Alone and palely loitering?"ll. 1 ～ 2)。第 4 ～11スタンザで騎士は、自身の奇妙な体験を語るが、それは以下のようなものだ。

騎士は草原で美少女と遭遇し忽ち恋に陥る。彼女を自分の馬に乗せ一日中じっと見つめ続ける騎士に向かって、その女性は"A fairy's song"(l.24)を歌う。彼女は騎士に、"roots of relish sweet"(l.25), "honey wild","manna dew"(l.26) を与え、"I love thee true"(l.28)と告白しているようだ。彼女の "elfin grot" (l.29)へ連れ込まれた騎士は、彼女に寝かせつけられる("she lulled me asleep," l.33)。その際彼女の魔力が作用したと見え、騎士は極めて奇妙な夢を見る。

I saw pale kings, and princes too,
Pale warriors, death pale were they all;
They cried— "La belle dame sans merci
Hath thee in thrall!" (ll.37～40)

"pale kings" 、"princes" そして "Pale warriors" 同様、この騎士も魔女の虜にされてしまった。彼らはすべて pale と形容されており、それは病的なイメージをかもし出す。彼らが叫ぶ "La belle dame sans merci" は魔性の女であり、王や兵などの男性は彼女の grot に閉じ込められ、生気が失せすっかり意気消沈している[6]。続く第11スタンザでこの騎士は、"I saw their starv'd lips in the gloam/With horrid warning gaped wide," (ll.41～2)と、彼らの様子を描写している。とりわけ彼らが、"starv'd lips" を恰も間が抜けたように開き、騎士に向かって警告を与えているという表現は、生ける屍の如き彼らを地獄の亡者どもとオーバーラップさせてイメージすることを可能にしてくれる。

やがて夢から目覚めた騎士は、侘しい冬の湖岸にいることに気づく(ll.43〜4)。冒頭のスタンザの詩句

Alone and palely loitering?
The sedge has wither'd from the lake,
And no birds sing. (ll. 2 〜 4)

は、作品の最終部でもリフレインされている。しかし、冒頭の部分では語り手が述べるのに対し、最終部分では騎士がリフレインするのは興味深い。語り手は、鳥のさえずり一つ聞こえてこない、あたり一面冬枯れの湖岸を言及すると同時に、第2スタンザで "The squirrel's granary is full,/And the harvest's done." (ll. 7 〜 8)と述べ、豊穣のイメージも暗示する。なるほど冬は生物の死を象徴しているが、秋の実り豊かな収穫で、リスが越冬するための食糧は充足している。それとは反対に、この騎士は "So haggard and so woe-begone?" (l. 6) と病的な様子である。この部分は、リスの豊かな穀倉と、死を象徴するような病的な騎士が大きなコントラストを成している。

騎士は、魔女の誘惑を受け、彼女の洞窟で廃人同様になってしまった。生ける屍の如き騎士が、重々しい気分で冬の湖岸に佇むとき、荒涼とした冬の光景は彼の憂鬱なムードとオーバーラップし、彼はより一層メランコリックになっていたに違いない。無論彼には、冬の沈黙の中に潜む生命感など無縁であった。

ところで、同作者による *Ode on a Grecian Urn* では、沈黙は異なった意味を持つ。この作品は、古代ギリシアの甕の表面に描かれた絵柄を眺めながら、語り手が絵の内容についてあれこれと詮索するという趣向である[7]。第1スタンザ冒頭で語り手は、"Thou still unravish'd bride of quietness," と呼びかけ、更に10行目では "What pipes and timbrels?" と尋ねている点から、この甕には婚礼の場面が描かれていて、新郎新婦、列席者や楽師たちの姿も見えるようだ。無論絵であるため、動きは全くない。従って、異性を狂おしく求める様子("what mad pursuit?" l. 9)は、永遠にこの状態で静止し、花嫁に口づけせんばかりの若者も、決して彼の欲求が満たされることはない(" Bold lover, never, never canst thou kiss,/Though winning near the goal—"ll.17〜 8)。婚礼の祝歌を奏でる楽師たちの姿も静止し続けていて、旋律が聞こえて来ることはあり得ないが、それだけ益々その甕を鑑賞する者の想像力は掻き立てられる。第2スタンザ冒頭で、

Heard melodies are sweet, but those unheard
Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;
Not to the sensual ear, but, more endear'd,
Pipe to the spirit ditties of no tone:
(ll.11〜 4)

と述べる語り手の胸中では、聞こえない楽曲が一層甘美に鳴り響くという一見不可解な現象が生じている。完全に静止した甕絵は深い沈黙を守り続けているにもかかわらず、絵が人の魂を直接刺激し、その人の心の中を妙なるメロディーで満たす。そうなると、実際その場で楽師が演奏していなくても、甕絵を眺めているだけで人の胸中は旋律で溢れる。そして、"sensual ear" ではなく "spirit" に直接訴えかける音楽の方がより一層美しいものであると、語り手は述べる。目前で実際に行われている演奏は、専ら人の聴覚を刺激する。だが、魂を揺さぶる「沈黙の音楽」は具体性を欠くが故に、恰も永遠世界から漂ってくるかのような神秘性を有している。

Wordsworth の *To the Cuckoo* の語り手は、姿は見えないがさえずり声のみ聞こえてくる Cuckoo に向かい、"shall I call thee Bird,/Or but a wandering Voice?" (ll. 3 〜 4)[8]と問いかけ、最後の第8スタンザを、

O blessed Bird! The earth we pace
Again appears to be
An unsubstantial, faery place;
That is fit home for Thee! (ll.29〜32)

と断言しつつ結んでいる。この語り手がCuckooのさえずり声を聞くと、人間世界は、"An unsubstantial, faery place;" のように思えてくる。地上が実体のない(unsubstantial)ものとなった瞬間、そこは永遠性を帯びるだろう。だが、この作品では、実際に語り手が耳にしたCuckooのさえずり声が題材として取り上げられている点は、甕絵に登場する楽師たちの奏でる、沈黙した楽曲について言及するキーツのオードとは異なる。

Ode on a Grecian Urn の第4スタンザを見てみよう。

Who are these coming to the sacrifice?
  To what green altar, O mysterious priest,
Lead'st thou that heifer lowing at the skies,
  And all her silken flanks with garlands drest?
What little town by river or sea shore,
  Or mountain-built with peaceful citadel,
    Is emptied of this folk, this pious morn?
And, little town, thy streets for evermore
  Will silent be; and not a soul to tell
    Why thou art desolate, can e'er return. (ll.31〜40)

祝宴に犠牲を捧げる儀式に参列する人々を描いたこの部分は、厳粛に式を執り行う神官と生贄の子牛、そして儀式を見守る敬虔な親族たちの様子を如実に伝えている。空に向かい空しく鳴き声を上げる子牛の声は、楽師たちの奏でる楽曲同様、読者の耳には永遠に聞こえてこない。それに続く35行目以下で、婚礼に列席している親族たちに対する言及がある。晴れの祝宴に出席するため、新郎新婦の親類縁者はこの日の朝、海辺若しくは山中にある自分たちの住処からやって来た。その当日、彼らが不在となったため、恰も寂れてしまったかのように町は静寂に包まれていた。その静寂は今後永遠に続くだろう("And, little town, thy streets for evermore/Will silent be;" ll.38〜9)。なぜなら、婚礼に列席するため目下不在である町の住民は、甕絵の中で静止し続けているからだ。列席者が甕絵から抜け出して、自分たちの町へ戻ることは不可能であり、従って町の他の住人に、人気がなくなってしまった理由を彼らは説明できない("not a soul to tell/Why thou art desolate, can e'er return." ll.39〜40)。

永遠にdesolateとなった町は、前述した *Silent Spring* に登場する、DDTを散布された町と一見類似している。だが、*Ode on a Grecian Urn* の場合、静止した甕絵の中に凝集した美の極致がメインテーマとなっていて、*Silent Spring* のように、農薬の薬害が生物界にもたらす死といった否定的イメージとは無縁である。それは、最終スタンザで語り手が、

When old age shall this generation waste,
    Thou shalt remain, in midst of other woe
Than ours, a friend to man, . . . (ll.46〜8)

と述べ、命に限りがある人間よりもこの甕が生きながらえることを示唆している点からも納得できる。いつの世になっても "woe" から決して解放されない人間に向かい甕は、"Beauty is truth, truth beauty," (l.49)と述べる。美こそ真実であり、また永遠でもある。永遠の美というテーマが基調となりこの作品が出来上がっているため、住民が婚礼に出席し人通りが途絶えて静まり返っている町も、読者に侘しさや喪失といったムードを与えることはない。無論それは、魔女に身を打ちひしがれた甲冑の騎士がさ迷う、冬枯れの湖岸の病的な沈黙でもない。

(Ⅲ)

Silent Spring に登場する町は、突然 "A white granular powder" を散布された結果、その薬害によりあらゆる生命がダメージを受け、すっかり荒廃してしまった。即ち、農薬により生態系が乱され環境が破壊されたのだ。環境破壊に対する警鐘とも解釈できる興味深い詩は、William Wordsworth の作品中にも見出すことができる。以下で詳しく読んでみよう。

Nutting は *Lyrical Ballads* 1800年版所収の小品で、Wordsworth がドイツ滞在中に作られた作品である[9]。好天に恵まれたある日、主人公はハシバミの実を採取するため意気揚々と家を出る。彼の "frugal Dame" (l. 9)[10]の言いつけで "thorns, and brakes, and brambles" (l.11)を物ともしない "Motley accoutrement" (l.10)を身に纏った彼は、さながら "Beggar's weeds" (l. 7)を着けているようだ。続いて彼は、"Among the woods,/And o'er the pathless rocks, I forc'd my way" (ll.12～ 3)と述べている点から、人跡まれなはるか遠方の森へ向かったらしく、そのような場所へ向かうには人為的な虚飾を一切排除した仕事着は最適である[11]。

ようやく彼は、森の奥へ辿り着く("Until, at length, I came to one dear nook/Unvisited, " ll.14～ 5)。"Unvisited" という表現から、恐らくここには他の人物は誰も来ていない。続いて彼は、

. . . where not a broken bough
Droop'd with its wither'd leaves, ungracious sign
Of devastation, . . . (ll.15～ 7)

と述べ、この場所が他人に荒らされていない "A virgin scene!" (l.19)であることを明らかにする。果たせるかな、ハシバミは "milk-white clusters" (l.18)を垂れてたわわに実をつけている。先客が誰もいないことに気をよくし、彼は逸る気持ちを抑えて一先ず休息して、周囲の草花と戯れる余裕さえ示す(ll.23～ 4)。その場所は以下のように描写されている。

—Perhaps it was a bower beneath whose leaves
The violets of five seasons reappear
And fade, unseen by any human eye,
Where fairy water-breaks do murmur on
For ever, and I saw the sparkling foam,
And with my cheek on one of those green stones
That, fleec'd with moss, beneath the shady trees
Lay round me scatter'd like a flock of sheep,
I heard the murmur and the murmuring sound,
In that sweet mood . . . (ll.28～37)

その場所は、茂る木々の葉に日光を遮られ休息に適している。林床では人目につかず、スミレが毎年花をつけては枯れていく。傍らのせせらぎは絶えず瀬音をたてて流れている。木々の下に羊の群れの如く点在するコケ生した石に彼は頬を当て、その瀬音を聞きながら快楽に浸っているようだ。大木の木陰の林床には草花が茂り、周囲のせせらぎは水を絶やすことはない。そのような環境がもたらす適度の湿気により、緑のコケが生い茂っている。この森林全体は、植生のバランスが保たれていると言えるだろう。

楽園のような林内で癒しを得た彼は、やおら立ち上がりハシバミの実を採取し始める(l.41)。

And 〔I〕 dragg'd to earth both branch
and bough, with crash
And merciless ravage, and the shady nook

Of hazels, and the green and mossy bower,
Deform'd and sullied, patiently gave up
Their quiet being; . . . (ll.42～6)

無慈悲にも大枝小枝を手当たり次第に引っ張ったので、枝は音を立てて折れた。その結果、先ほど彼が休息していた美しい緑の木陰まで台無しになり汚れてしまった。彼によって森の flora は乱されてしまったのだ。それにしても、人間がこれほどまで乱暴にハシバミの枝をへし折ったり、静かな木陰を破壊したにもかかわらず、自然は何一つ抵抗することなく人間のなすがままに任せていたのは興味深い。自然を女性に見立て、この場を女性に対する陵辱として解釈することも可能である[12]。

さすがに、語り手は己の成した事に対し後ろめたさを感じていたのであろう。

. . . when from the bower I turn'd away,
Exulting, rich beyond the wealth of kings—
I felt a sense of pain when I beheld
The silent trees and the intruding sky.— (ll.48～51)

ハシバミの実を大量に収穫できた喜びと同時に、彼は無残に痛めつけられた木を見て心の痛みも覚えた。何一つ非難の言葉を浴びせることなく無抵抗な "the silent trees" に対し、その枝を引っ張ったりへし折ったことで隙間が生じ、林床に日光が差し込むような変化が起きた。それは恰も、空が侵入してきたかのようであり、語り手に取り天の咎めとも思えたに違いない。最後に彼は、以下のような教訓を与える。

Then, dearest Maiden! Move along these shades
In gentleness of heart; with gentle hand
Touch,—for there is a Spirit in the woods. (ll.52～4)

枝が折られ林床にまで日光が差し込むと、コケや下草など陰湿な土地を好む植物は次第に枯れていく。そうなると林床は保水力を失い土地は乾燥する。その影響は木々にも及び、やがて木々が枯死し森全体が失われるのである。Wordsworth は、森林の生態系バランスに関し、知識が豊富であったようだ。

同じく1800年版 *Lyrical Ballads* 所収の *Hart-leap Well* も、甚だ ecological な内容である[13]。この作品は二つの部分から成り立っており、第1部は Sir Walter が、13時間にもわたり逃走し続けた鹿を、ついに泉のほとりまで追詰め仕留めたという武勇伝を語るものだ。この世のものとは思えない大追跡("This race it looks not like an earthly race;" l.27)[14] を記念し、Sir Walter は鹿が息絶えた泉のほとりに "a Pleasure-house" (l.57)と "a small Arbour" (l.58)を建てることを決心する。そして彼は、泉の水を引き込んだ "A bason" (l.62)を職人に造らせ、その泉を "Hart-leap Well" (l.64)と名づけた。彼はそこへ "paramour" (l.70)や "dancers" (l.71)を連れてきて、歌舞音曲で賑やかな酒宴を催すことを目論んでいるのだ。そして、"Till the foundations of the mountains fail/My mansion with its arbour shall endure;" (ll.73～4)とまで豪語する。やがて、Walter は死に第1部は終了する。

第2部は第1部と物語の視点は変わり、語り手が実際にこの土地を訪れた際、地元の羊飼いから聞かされた Sir Walter の「偉業」を、語り手自身のコメントを加えながら回想するという趣向である。無論語り手は、Sir Walter の前代未聞の追跡より、哀れな鹿とすっかり荒れ果てた Walter の "a Pleasure-house" 、"a small arbour" や "A bason" に焦点を絞っている。

かつて栄華を誇った "a Pleasure-house" は、現在その痕跡をほとんど留めていない。羊飼いは語り手に、"you might as well/Hunt half a day for a forgotten dream." (ll.131～2)と述べ、更に "the spot is curs'd" (l.124)と断言する。語り手自身、Hawes から Richmond へ向かう途中この土地で馬を止めたとき、"Here in old time the hand of man has been." (l.112)と直観した。にもかかわらず、続けて彼は、

More doleful place did never eye survey;
It seem'd as if the spring-time came not here,
And Nature here were willing to decay. (ll.114～6)

と述べ、これほど寂れた場所は他になく、春の訪れを知らない自然は、自然本来の生気を失ってしまったかのようだ、と感慨深げに述べる。

谷間から登ってきた羊飼いは、瀕死の鹿が13時間にもわたり疾走を続けた挙句、この泉のほとりに辿り着き息絶えた理由を、以下の如く推測する。

Here on the grass perhaps asleep he sank,
Lull'd by this fountain in the summer-tide;
This water was perhaps the first he drank
When he had wander'd from his mother's side.

In April here beneath the scented thorn
He heard the birds their morning carols sing,
(ll.149～54)

鹿はこの場所で生まれ、母親の乳以外最初に飲んだものは、この泉の水だったかもしれない。そして、子守唄のように泉の水音を聞きながら眠っていた。4月になるとサンザシが香り、小鳥のさえずりも聞こえてきた。かつてこの土地は自然界の楽園であり、鹿はこの楽園で過ごした幼いころの記憶を頼りに、死の直前長時間にわたり最後の力走を行い、故郷へ辿り着いた。だが、現在ここには草も生えず("But now here's neither grass . . . " l.157)すっかり荒れ果ててしまった。無論、春になっても小鳥のさえずりは聞こえてこない。それは、Sir Walter が無残に鹿を殺し、容赦なく自然を破壊して、この場にそぐわない歓楽の館を建造したことに対する祟りであると、この羊飼いは言いたげだ。更に羊飼いは、"So will it be, as I have often said,/Till trees, and stones, and fountain, all are gone." (ll.159～60)と、Walter の成し遂げた痕跡はことごとく消え去るであろうと予言する。

語り手も羊飼いと同じ考えであることを認め、更に彼は以下のように述べる。

This beast not unobserv'd by Nature fell,
His death was mourn'd by sympathy divine.
The Being, that is in the clouds and air,
That is in the green leaves among the groves,
Maintains a deep and reverential care
For them the quiet creatures whom he loves.
(ll.163～8)

鹿の死は哀れむべきであるが、"sympathy divine" により鹿は弔われた。The Being が雲中や空中に、また森の緑の葉の中に存在していて自然界の万物を支配し、大人しい生き物をこよなく慈しんでくれる。そして、自然にダメージが加えられると、因果応報で加害者は復讐される。

The Pleasure-house is dust:—behind, before,
This is no common waste, no common gloom;
But Nature, in due course of time, once more
Shall here put on her beauty and her bloom. (ll.169～72)

Sir Walter が誇っていた "The Pleasure-house" は、今や尋常でないほどまでに崩壊し、周囲はすっかり荒れ果てている。だが同時に、自然は元の状態を回復する。この寂しい場所にもやがて美しい花が咲くであろう。荒廃した過去の遺物は、再び草本が茂りそれによって覆い隠されてしまう。語り手が目の当たりにしている、その土地の朽ち果てた状態は、"She〔Nature〕leaves these objects to a slow decay/That what we are, and have been, may be known;" (ll.173〜4)という自然の意図によるものである。身の程知らずにも自然を破壊する人間に対する、一種の見せしめといえる。*Nutting* では、無残にへし折られたハシバミの木や荒らされた木陰を見て、作品の語り手は良心の呵責を感じた。*Hart-leap Well* でも、Sir Walter の所業は衆人に曝され、自然は彼らに戒めを与える。最終スタンザで語り手は羊飼いに向かい、

> One lesson, Shepherd, let us two divide,
> Taught both by what she shews, and what conceals,
> Never to blend our pleasure or our pride
> With sorrow of the meanest thing that feels."
> (ll.177〜80)

と述べ、自然界のどれだけ小さな生物に対しても、人間が驕り面白半分に甚振ってはならないと諭す。唯一人間だけが理性を用いて思考し(*ratio*)、言語を話す(*oratio*)[15]。この理由により、人間と他の生物の間に大きな隔たりが生じ、人は誤った優越感を抱き、万物の支配者として勝手気ままに振舞うようになった。今日世界中で大きな問題となっている環境破壊や自然破壊も、人間の驕りがもたらしたものである。*Hart-leap Well* の自然は、自己回復能力を未だ有しているようで、前述の如くやがて Sir Walter の遺物は完全に草本に覆い隠され、そこに美しく花が咲き本来の自然が回復するだろう。だが、世界的規模で自然破壊が進んでいる今日、自然の回復力は破壊のスピードに追いつけなくなっている。森林の樹木が大量に伐採されると森の保水力は失われ、かつての森林は乾燥しやがて砂漠化する。また、保水力のなくなった山地に降雨があると、大量の雨水は一挙に谷に流れ込み、下流域は洪水に襲われる。洪水は夥しい数の人畜を犠牲にするだろう。自然は、加害者の人間に対し、恐ろしい復讐を成し遂げたといえる。しかし、Wordsworth の時代、The Industrial Revolution が始まったばかりで、人々は地球的規模の自然破壊など想像も出来なかった筈だ。*Nutting* では、主人公の少年に荒らされたハシバミや森の木々が彼に後ろめたさを痛感させ、また *Hart-leap Well* でも Sir Walter の不自然な館はすっかり荒廃し、草本で覆われ辛うじてその痕跡をとどめているに過ぎなかった。いずれの場合も、自然が災害などを人間にもたらし、復讐を遂げることはない。とは言うものの、たとえ消極的であっても自然は人間に対し、一種の protest を行っているのは興味深い。Carson の *Silent Spring* では、害虫駆除のため乱用した DDT が、人畜に被害を与えたばかりか、突然変異で DDT に耐性を持つ害虫が大発生したため益々大量に DDT を散布するという悪循環が生じ、大地も河川も海水も汚染されてしまった。Wordsworth の時代には存在しなかった有機塩素系、有機リン系の殺虫剤が次々と開発された現在、その薬害も過去とは比べ物にならないほど深刻化している。

(結び)

樹木が茂り草花が咲きそろう森林やのどかな田園地帯への人類の憧憬は、近代人に固有のものではない。古代ローマの詩人 Virgil は Arcadia の山野を理想郷の如く作品中で謳い上げ、またキリスト教国の人々は旧約聖書創世記に登場する Eden を、楽園として崇めていたことは言うまでもない[16]。Arcadia や Eden が Utopia とみなされていたという事実は、逆に彼らの実生活の場がどれだけ理想とかけ離れているかを知るための手がかりとなる。Virgil は、imperialism によって支配されていた当時の大都会 Rome で作品を執筆していたのであった[17]。

やがて19世紀を迎え、イギリスでは世界最初に Industrial Revolution が始まると、オートメーション化による大規模工場が誕生し、労働人口が工場のある都市に集中することで、益々都市と田舎のコントラストが著しくなる。山野は工場用地として開発され、鉄道が敷かれた。同時代のイギリス・ロマン派詩人の中でも Wordsworth は、とりわけイギリスの山野の自然を作品のテーマとして取り上げたことで知られている。彼も自然をこよなく愛する

一方で、18世紀啓蒙主義に触発された科学による進歩の代償として、自然が破壊され始め人々が自然と一体化できずにいることを大いに危惧していた。*Guide to the Lakes* は、Wordsworth の作品中最もよく売れたといわれている散文で、経済的理由のみならず自然破壊を protest する目的で書かれた [18]。環境破壊に対する Wordsworth のこういった態度は、後に National Trust 運動を生み出す契機となったことは明確である [19]。

先に述べたように、Wordsworth の時代とは比較できないくらい大きなスケールで、現代の環境破壊は進んでいる。次々と森林は宅地として開発され、大都会が生まれ高層ビルが立ち並ぶ。工場から排出される煤煙や廃液には有害な物質が含まれていて、河川や海水は汚染される。また、放射性物質による汚染は、Wordsworth の時代には想像さえできなかった。現代人の住環境からは、かつて共存していた動植物のうちある種のものはすっかり姿を消し、その絶滅が危惧されるまでになった。Condominium が普及し、住居が高層化した結果、人々は益々土から遠ざかっていくように見えるが、彼らはそれを「洗練された=cultivated」証であると錯覚している。cultivate には、「土を耕す」という意味もあることを忘れてはならない。

とは言うものの、アウトドアースポーツとしての山野の散策や、ガーデニングなどに対する人々の関心は、最近俄に高まりつつある。彼らは、庭やベランダに創意工夫を凝らしてそこで草木を栽培し、さながら自然の懐に抱かれているかのような気分に耽る [20]。Ecology の語源を調べると、eco-はギリシア語の *οικος* (the home or place of dwelling)から由来している [21]。また、ecology という語を最初に作ったのはドイツの動物学者 Ernst Häckel で、1866年のことであった [22]。無論ドイツ語では Ökologie となる。尤も Häckel は生物とその環境に関し科学的に考察する際、この語を用いたようで、人間は視野に入れられていなかった [23]。人間とのかかわりでこの語を用いたのは、Ellen Swallow というアメリカ人女性であり [24]、彼女はアメリカにおける環境保護運動のパイオニアとみなされている。その語源に "place of dwelling" という意味が含まれている以上、住環境を無視することはできない。従って、庭に草木を植えそこに小鳥を呼び寄せ、庭を自然の一部らしく見せかけることで、人々が精神的に癒されるなら、それは住環境を改善したことを意味し、豊かな緑を取り戻した森林、有害物質で汚染されない水が再び流れるようになった河川などと同様、人々の生活向上に貢献する。Gardening が単なる道楽ではないことは、以上の点から明確となる。これほど環境破壊がやかましく叫ばれている昨今、Gardening に対する人々の関心が従来以上に高まっている意義は深い。

本稿では、Carson の *Silent Spring* を取り上げ、「沈黙」に関しとりわけ環境問題に焦点を当てながら、イギリス・ロマン派のいくつかの作品と比較検討してきた。*Silent Spring* は、自然科学のカテゴリーに属する書物である。豊富な注釈に助けられ、専門外の人間でも読破することは不可能ではないものの、医学、薬学、生物学などの知識が十分でなければ、この書物を完全に理解することは困難であろう。この書物のみならず、ecology に関する論文は、概して科学的な内容であり、従来文学者のような門外漢には無縁のものであるとみなされてきたようだ。それどころか、文学者自身が、それに触れることをタブー視してきたのではないだろうか。だが、環境問題は万人が取り組むべき問題であり、文学者にもそれなりの役割が与えられているに違いない。例えば、科学者は汚染などのデータをこと細かく数字で紹介するが、それは一般人には十分な説得力を持たない場合が多い。一方詩人は、比喩やアレゴリーなどを巧みに用い美辞麗句で飾り立てる [25]。主観を完全に排除し、理性を用いて冷徹に判断するのが自然科学者の研究態度であるべきだが、純粋に科学的なアプローチだけでは、研究対象をその枠組みにとじこめてしまう恐れもある [26]。そのような研究態度では、研究対象の美的魅力は乏しくなり、一般人に驚嘆を呼び起こすことはない。特に、自然破壊の場合、美的要素をふんだんに有した自然を取り扱うので、そこから美的価値を取り去ると、極めて味気がなくなる。尤も、実際以上に誇張することも同様に許されるべきではないと思える。

この拙論は注12で言及したように、Jonathan Bate 著 *The Song of the Earth* に触発され執筆した。Bate は元来 Shakespeare 研究者として国際的評価を得ていたようだが、*The Song of the Earth* の中で、イギリス・ロマン派詩人を中心に、英語圏以外の作家や哲学者に関しても詳細に論じている。更に、自然科学の分野に対する造詣も深いようで、その豊富な博物学的知識は自ずと読者を彼の著作へと誘い込む [27]。概して、ecology をテーマとした文学系論文は、そのタイトルにそぐわず単なる文学作品研究といった内容のものが目立つ。しかし、環境破壊が切迫した危機感を与えている現在、文学研究者もそのお家芸を最大限活用しつつ、環境問題に積極的に取り組まなければならない。

（注）

1 Rachel Carson, *Silent Spring* ("Penguin Classics Series" ; London: Penguin Books, 1999). 尚、同書の邦訳 レイチェル・カーソン著　青樹築一訳　『沈黙の春』（東京: 新潮社, 2002年）も随時参照した。

2 原初の自然が今でも広範囲にわたって残されているヒマラヤ周辺や、南米アマゾン河流域などでは、鬱蒼とした原始林の樹木の幹一面に、コケ類、地衣類が着生し、その間にラン科をはじめ数十種類の着生種が共生している。中には、Climax 状態で、かなりの年月の間互いに「助け合い」ながら、生育を続けてきたと思えるものも見つかる。だが、材木として樹木が伐採されると、同居している他のすべての植物も道連れとなり、とりわけ貴重なラン科植物などは枯れてしまう。実際、このような理由で絶滅が危惧されている植物は少なくない。

3 DDT は、光や酸化にも強く、一度水や土、農作物に残留すれば容易に分解しない。大量に体内に取り込まれると、震顫、強直性痙攣、心不全、呼吸不全などの急性症状を呈し死亡する。体内に徐々に蓄積された場合、肝障害、顆粒球減少、皮膚炎などを引き起こし、重篤な場合昏睡症状からやがて死をもたらす。Susan Budavari et al. (Eds.) *The Merck Index: An Encyclopedia of Chemicals, Drugs, and Biologicals* (11th Edition) (New Jersey: Merck & Co. Inc., 1989) に拠る。わが国では、現在 DDT の使用は禁止されている。

4 Rachel Carson pp.35〜6. Carson は、人体に直接ふりかけたのは、DDT の粉末だったため害がなかったと述べている。なぜなら、粉末の場合皮膚からは余り吸収されないからである。しかし、乳剤として油に溶かして用いると、DDT は大変危険な物質となる。一旦体内に入ると、DDT は極めて残留性が強いため長期間体内に留まり、更に DDT に汚染された農作物を摂取すると、益々体内での濃度を増す。

5 本稿中の Keats からの引用は、全て下記に拠る。Jack Stillinger(Ed.) *John Keats: Complete Poems* (Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 1982).

6 このように、男性を滅ぼす魔性の女は femme fatale と呼ばれ、各国の伝説にしばしば登場する。わが国の「雪女」もその類である。この問題を論じた名著は、Mario Praz, Angus Davidson(Tr.) *The Romantic Agony* (Oxford: Oxford University Press, 1970), pp. 197〜300である。尚、同書には以下の邦訳もある。マリオ・プラーツ著、倉智恒夫　他訳『肉体と死と悪魔』（東京: 国書刊行会、1986）。

7 拙論「*The Solitary Reaper* 論考—乙女の歌をめぐって」『研究誌』第25号（金蘭短期大学、1994）pp.67〜90で、この作品に言及している。第 2 スタンザ冒頭を取り上げ、Wordsworth の *The Solitary Reaper* に登場し独りで麦を刈る乙女の歌と比較検討した。

8 Jared Curtis(Ed.), *Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807 by William Wordsworth* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1990). 尚、注 7 の拙論でも、この問題に触れている。

9 拙論『ワーズワス「鹿跳びの泉」論考—鹿の逃走について』『研究誌』第32号（金蘭短期大学、2001), pp.35〜48でも *Nutting* を取り上げ論述した。

10 James Butler, Karen Green (Eds.), *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800 by William Wordsworth* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1992)

11 William Falkner の中編小説 *The Bear* では、主人公が追い求める巨大な熊に遭うため、森の入り口で彼は銃、磁石、時計などの文明の利器を全て捨て去る。そして、ついに彼は熊と遭遇する。川崎寿彦著『森のイングランド　ロビン・フッドからチャタレー夫人まで』（東京: 平凡社、1987), pp.290〜2。

12 Nature を女性とみなし、feminism 的見地から ecology を解釈する試みも盛んに行われている。Jonathan Bate, *The Song of the Earth* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2000)は、ecology を特にイギリス・ロマン派の詩と関連付けて論じた力作で、feminism、imperialism、と ecology との関係も詳しく論じられている。本稿作成に当たり、同書に負うところが極めて大きい。

13 注 9 で紹介した拙論で、長時間疾走した鹿について、Byron 作 *Mazeppa* と比較しながら詳しく論じておいた。

14 作品の引用は注10で紹介の原書に拠る。

15 Jonathan Bate, p.243. 尤も、高等なサルも一種の試行錯誤により学習し、これも reasoning とみなせると、Bate は指摘している。

16 とは言うものの、Eden の園が具体的にいかなる場所だったか、聖書にはまったく示されていない点も興味深

い。従来禁断の木の実はリンゴであるとされてきたが、それとて聖書中には具体的な言及は見当たらない。禁断の木の実がリンゴであると推測した最初の人は John Milton で、*Paradise Lost* 中にリンゴとして登場する。詳細は、H&A　モルディンゲ著、奥本裕昭　編訳『聖書の植物』(東京: 八坂書房、1995)参照のこと。因みに、数百種にのぼるとされる Eden の植物のうち、具体名が出ているのはイチジクのみであるようだ。中山　理著『イギリス庭園の文化史』(東京: 大修館書店、2003), pp.10〜3。

17 Jonathan Bate, pp.73〜4.

18 吉田正憲著『ワーズワスの「湖水案内」』(東京: 近代文藝社、1995), pp.9〜16。尚、ジョナサン・ベイト著、小田友弥、石幡直樹共訳『ロマン派のエコロジー: ワーズワスと環境保護の伝統』(東京: 松柏社、2000), pp.77〜102にも、詳しい言及がある。

19 National Trust は、イギリスで1895年に設立された。

20 ヨーロッパで Gardening は、既に古代ギリシア、ローマ時代に行われていたようだ。しかし、中世には修道院や王侯貴族の居城でハーブなどが細々と栽培されていた以外、Gardening はヨーロッパから姿を消し、むしろイスラム世界などで盛んに行われていた。やがてルネサンスを迎えると、Gardening は再びヨーロッパに持ち込まれ、最初イタリアで「イタリア式庭園」を生み出した。それはフランスによって受け継がれ、「フランス式庭園」という独創的なスタイルに発展した。これは幾何学的な模様に草木を植栽するもので、French formal と呼ばれている。他方イギリスでは、庭の中に自然の風景を造りだし、自然らしく見せかけることに重きが置かれた。British natural と呼ばれるこの庭園様式は、現代にも受け継がれている。詳しくは、日本園芸協会編『ガーデニング講座』3 Vols. (東京: 日本園芸協会、2002)参照。

21 Jonathan Bate, p.75.

22 ジョナサン・ベイト著、(注18参照)、p.69。

23 *Ibid.*, p.69。

24 *Ibid.*, pp.69〜70。

25 Jonathan Bate, p. 251.

26 *Ibid.*, p. 255.

27 とりわけ、ルーマニア生まれのユダヤ系ドイツの詩人 Paul Celan(1920〜70)に関し、大変示唆的な言及を行っている。Celan も博物学的な知識を豊富に持った詩人で、特にラン科植物に精通している。派手な色彩と特異な形態で人々を魅了してやまないランは、そのために乱獲を免れず、絶滅に瀕した希少種が毎年増えつつある。誇るべき偉大な歴史を持つが、Nazism による迫害と虐殺に苦しんでいた当時のユダヤ人を、Celan はランとオーバーラップさせる。だが、彼は単にランを象徴的に用いているのではなく、豊富な分類学的、植物形態学的な知識を作品の至るところで披露している。ところで、最近映画化もされ欧米でベストセラーとなっている、Susan Orlean, *The Orchid Thief* (New York : Random House, 1998)は、西インド諸島原産の極めて珍しい形態を持つラン *Polyrrhiza lindenii* を、採集厳禁の自生地から持ち帰り、大量に増殖させ一攫千金を夢見た悪漢を主人公にした犯罪ものの物語である。邦訳は、ハヤカワ文庫から、『蘭に魅せられた男一驚くべき蘭コレクターの世界』という表題で出版されている。ほぼ全てのラン科植物の山採り品は、ワシントン条約で輸出入が厳しく禁じられている。ただし農園で営利栽培されているものはその限りではない。にもかかわらず、例えば東南アジア熱帯地域の蘭園へ蘭コレクターが蘭の株を求めて行くと、農園主はコレクターを密かに裏へ案内し敢えて禁止リストにノミネートされている珍種を見せ、一株数十万円という値段を呈示する。これは現地の一般労働者なら、数年分の収入に値する額である。他方、それは高額ではあるものの、わが国の所得水準なら手が届く。無論、その株は農園主が非合法的に入手したものであろう。従って、金に糸目をつけないカスタマーが存在し続ける限り、希少品種の乱獲と密売という悪循環は絶えることはない。このような事実は、先進国と開発途上国との間の極端な収入格差が主要な原因となっていることは言うまでもない。蘭をテーマとした文学作品は極めて僅かであるにもかかわらず、敢えてこのような作品が出版映画化され、オスカーにまでノミネートされたという意義は大きい。貴重な自然保護に対する、人々の自意識の表れととるべきであろう。